

もくじ

まえがき	2
学ぶことに関するアンケート結果報告	4
クリスチャン学生への「学問のすゝめ」 (大塚寿郎 上智大学文学部教授)	14
聖書から考える「学ぶことの意味」 ～「キリスト者の知性」を育む～ (鎌田泰行 キリスト者学生会関東地区主事)	25
大学院進学を考えている諸君へ ：専門職、研究職の使命と未来 (梅津光弘 慶應義塾大学商学部准教授・志学会実行委員長)	50
Q & A	55
あとがき	61

※本文中の聖書引用は新日本聖書刊行会訳『聖書 新改訳聖書』によることを、ここにお断りしておきます。

まえがき

本書は、キリスト者として「学ぶことの意味」を真剣に考える学生達の交わりから生まれました。キリスト者として「この世に生きる」ということを考える時、学生が「学ぶことの意味」を考えることは、本来避けて通ることができません。しかしながら実際にそれを真剣に考えたり、学んだりする機会は、決して多くは提供されていません。

良くある話ですが、熱心な信仰を持って教会やKGK（キリスト者学生会）で一生懸命奉仕し用いられていたとしても、「今学校でどんな勉強をしているの？なぜその専門を学んでいるの？」と聞かれた時に急に戸惑ってしまう学生がいます。自分の所属する学科や専攻の名称を即答できても、内容やその目的については曖昧で自信がありません。謙遜なのではなく、「学ぶことの意味」を一人のキリスト者として神様の前で受け止められていないのです。他でもなく私自身がそのような学生の一人でした。伝道や奉仕には熱心でも、学生の本分である学業は疎かにしていました。私にとって「信仰」と「学ぶこと」は結びつかない別々の事柄であり、「学ぶことの意味」などせいぜい「就職のため」としか考えていませんでした。

そんな私もKGKの交わりを通して、このことを真剣に考える交わりが与えられました。それは私のそれまでの価値観・世界観を大きく変えるきっかけとなった豊かな出会いでした。

この K GK が持つ交わりの豊かさと「学ぶことの意味」への問いを、より多くの方々と共有するべく本書は作成されました。本書では「学ぶこと」をめぐる学生のリアルな現状をアンケート結果で掲載しており、学生読者には共感と励ましを、そして学生以外の読者には現代学生理解を与えるでしょう。

また本書は「学ぶこと」に関してさまざまな立場と視点から深く考察された文章を複数収録しており、読者に多くの問いを投げかけると共に、「学ぶことの意味」の手掛かりを提供しています。それらは学生がそれぞれに自分の学びと向き合い、「学ぶことの意味」を一人のキリスト者として神様の前で受け止めていくことを間違いなく励ましてくれるでしょう。

本書がキリスト者学生と、また学生に寄り添うすべてのキリスト者に用いられることを心から願っています。

永井創世
元キリスト者学生会関東地区主事

「学ぶ意味」アンケート結果

このアンケートは、現代学生の「学ぶこと」への意識の現状を知るべく、大学・短大・専門学校生を対象として行いました。合計 178 名の方にご協力いただきました。本当にありがとうございました。

※専攻、学年はいずれも 2011 年時点のものです。

■あなたの現在の学校での学びの意識について教えてください。

①あなたがその学校・学部・専門を選択した理由は何ですか？

当てはまるものにチェックをしてください。複数回答可。

- ・将来の仕事に役立つ …90
- ・就職に有利 …21
- ・環境・雰囲気 …99
- ・偏差値 …27
- ・なんとなく …19
- ・おもしろそう・関心があった …113
- ・そこしか受からなかった …18
- ・その他 …16

②あなたが学んでいる理由は何ですか。

当てはまるものにチェックをしてください。複数回答可。

- ・興味関心があるため …125
- ・将来役立つ知識や技術を身につけられるため …116
- ・人との関わり方を学べるため …36
- ・受験・試験のための準備のため …14
- ・自分の生き方を見つけるため …46
- ・今の生活に役立つ知識や技術を身につけられるため …19
- ・真理の追求のため …20
- ・その他 …14

③学ぶことは好きですか？

- ・はい …120
- ・どちらともいえない …43
- ・いいえ …6
- ・わからない …4
- ・無回答 …5

④今の学びについてどう感じていますか。

また、その理由を教えてください。

- ・楽しい …89
- ・普通 …52
- ・楽しくない …6
- ・やめたくなることがある …21
- ・わからない …5
- ・無回答 …5

■あなたの学びの生活の実態について教えてください。

①授業になかなか集中できないことがありますか？

- ・はい …112
- ・どちらともいえない …48
- ・いいえ …15
- ・わからない …0
- ・無回答 …3

②カンニング、代返、論文盗用等の不正をしたことはありますか？

- ・はい …54
- ・いいえ …121

③授業中、学び以外にしたことがあるものを選んでください。

- ・寝る …158
- ・携帯電話操作 …124
- ・ゲーム …24
- ・読書 …85
- ・食事 …22
- ・回答なし …4

④卒業論文、卒業研究に取り組む予定がある方にお聞きします。

卒業論文・卒業研究に積極的に取り組みたいと思いますか？

- ・はい …94
- ・どちらともいえない…24
- ・いいえ …5
- ・わからない …19
- ・無回答 …36

■最後に、具体的に学ぶことについて考えていることを教えてください。

①クリスチャンの方にお聞きします。

あなたが学んでいく中で、クリスチャンとして葛藤を覚えたり、悩んだりしたことはありますか？または、学びの中で違和感を覚えたことはありますか？あれば具体的に教えてください。

<キリスト教に関する回答>

- ・無神論的立場から授業がなされる。(医4年)
- ・「人間と道德」という授業の中で、無宗教の人の道德観や倫理観の違いに驚いた。(教育1年)
- ・生命科学で「たまたま」を多用されるとき。(未定1年)
- ・聖書が事実であるという前提で言うと、そこを質問されることが多くある。(教育3年)
- ・テストの際に、聖書に反することを書かなければいけないとき。(心理3年)
- ・「キリスト教は…だから」と単純化されすぎた説明がなされるとき。
(未定1年)
- ・ノンクリスチャンの教授に反論したくても、知識が足りず太刀打ちできないと感じるとき。聖書の価値観を全く無視した講義を聞くとき。
(言語4年)

<時間管理に関する回答>

- ・信仰よりも学ぶことに熱中してしまい、周りが見えなくなる。(福祉2年)
- ・試験で忙しいと聖書を読まなかったり、祈ることを忘れてしまうが、時には聖書を読む時間にも勉強して試験成績を上げるために時間を使った方が良いのではないかと思うときがある。(工2年)
- ・学ぶべきことが多すぎて、忙しさに追われ、テストのためにただ詰め込んでいるだけなのではないか…とってしまうことがある。(看護4年)
- ・勉強が忙しいとき、なかなか神様との時間がとれないことがある。(工2年)
- ・日曜日に勉強するか教会に行くか。(工1年)

<各分野に関する回答>

- 数学を学び、数学の確かさ、厳密さを知った。数学の結果は絶対的に信用できるものだと思った。それに対して、聖書がどれだけ確かなのか、どれだけ信用できるのかと考え悩んだ。(数修士2年)
- 心理学を学んでいるので、霊的ケアが抜けていることに違和感を覚える。様々な社会問題や精神的問題を考えるとき、神様なくして考えられないし、「神様、この人たちに信仰があれば・・・」と思ってしまうとき、葛藤を覚える。(心理修士1年)
- 遺伝子組み換えについての研究をしているが、聖書に書かれている、人間が他の生物を支配することの範囲内に自分が行っているかどうか確信がない。(生物3年)
- 一般的な経済学の価値観に全く共感できない訳ではないが、違和感を覚える。本当に実用的なのかも分からない。(経済3年)
- 「六法全書はクリスチャンにとっての聖書と同じだ！この中にクリスチャンはいるか？」と言われて困った。(法4年)
- 性教育の授業をとったが、KGKで学んだことと違いがありすぎて出席することをやめた。(社会4年)

<学ぶ意味に関する回答>

- 学んでいることがクリスチャンライフの中でどのように役立つかわからないことがある。(国際関係4年)
- 学ぶことが生きているなかで本当に意味があるのか分からない。(福祉2年)
- 自分の学んでいることが、キリスト教や聖書とどういう関係があるのかが、いまいち分からなくなったとき。(言語4年)

<学ぶ姿勢に関する回答>

- 単位を取るための勉強はつまらないが、周りに流されてテスト前しか勉強しない自分が嫌い。(工学2年)
- 友人から代返・代筆を頼まれたとき、どうすればいいか悩む。(心理2年)

<進化論に関する回答> ※多数回答

- ・大学ではまだないですけど、中高で進化論を聞いていて、猿からだんだん人になったことが気に食わなくて、いらいらしてしまった。(看護学1年)
- ・進化論を学んでいるとき、真理でない知りつつ、それを論じなければならなかったため、葛藤を覚えた。(生物1年)
- ・テストで進化論的に答える問題が出たとき、葛藤があった。(看護4年)
- ・進化論とか、信じたり納得していいものか。納得しそうになったとき、悩んだ。(教育1年)

<自由主義神学に関する回答>

- ・ミッションスクールに通っているのですが、キリスト教学の学びについての姿勢がちがうことに違和感を覚え、どのように反応して良いか分からなかった。(保育3年)
- ・キリスト教学の講義は、リベラル派の視点で展開されるので、福音主義で育ってきた身としては、少なからず違和感を覚えた。(国際関係2年)
- ・キリスト教の授業で、福音から離れていると感じる部分があり、自分の考えが間違っているのかと不安になってしまった。(政治4年)
- ・文献学と聖書信仰の調和。科学と聖書の関係。(未定2年)
- ・教会で教わったことと、学校で学ぶことがズレていた時。手を挙げて発言した方が良いか悩む。(神1年)
- ・聖書学を学んで高等批評を勉強したとき。(国際関係4年)

<その他の回答>

- ・日の丸・君が代問題。(教育4年)
- ・世界の問題が複雑すぎて祈り方すら分からない。(社会4年)
- ・テストに全て合格したいとお祈りして挑んでも一つかなわなかった。(薬4年)
- ・KKGの交わりのなかに芸術系の学生が少なく、分かち合うときにずれを感じる。(芸術3年)
- ・まだ葛藤を覚えるほどの境地には達していないが、これから学んでいくなかで「葛藤」を覚えるんじゃないかとは予想している。というか葛藤を覚えたい。(物理1年)

③「学ぶこと」の意味について、あなたはどのように考えていますか？

- ・より視野を広くし、他者を理解することを通して、自分の価値観を理解する。(未定1年)
- ・生きていくなかでより良い選択をしていけるための判断を養うこと(哲2年)
- ・知識が増えれば、いろいろな視点を持てる。より深く聖書を読めるようになる。(経営4年)
- ・神様のみこころを行うための備え。(建築3年)
- ・聖書からだけでなく、知恵や知識を身につけることは将来用いられていくなかで大切だと思う。(国際関係4年)
- ・一人一人の賜物を生かすために必要。(保育1年)
- ・蛇のようにさとくあるため。(社会4年)
- ・知識をつけて、人生を充実したものとなるように工夫するため。そして最終的に、その人の人生を通して、周囲に神の栄光を現す。(神1年)
- ・本当に勉強が忙しく、辛かった二年生の頃、この学びが神さまのためだと気づくまでが大変でした。神さまが与えて下さった賜物を伸ばし、神さまの栄光を現すためと今は考えています。(教育4年)
- ・将来神様の与えてくださる計画に応じるために、知識や技術をたくわえるため。(工1年)
- ・先に進むための手段。(歯3年)
- ・確かに、すべての教科が将来の生活に役立つとは言えないと思うが、「勉強をする、学ぶ」姿勢を身につけることは重要であると思う。学ぶことは自分に向き合うことだし、忍耐が必要だし、だからこそ自分勝手に「これはいらない」と捨てるのではなく、取り組むべきだと思っている。(心理2年)
- ・クリスチャンは祈っているだけ、賛美しているだけでなく、知識もなければ周りの人も証を聞いてくれないから、しっかり学ぶ必要がある。(心理2年)
- ・知識が増えることによって伝道もしやすくなる。(保育1年)
- ・「社会的責任」を果たしながら神様のことを伝えていく。(工2年)
- ・文化命令としての学び。ノンクリスチャンの社会の中で証しをして伝道していけるようになるため。(保育3年)

- ・伝道の方法の幅を広げる。変わらないものとしての聖書に対して、変わるものとして刻一刻と変化する状況に対応するための一つの知恵を身につける。神さまのすごさを知る。聖書に出てくる難しい言葉への理解が深まる。(社会 M1 年)
- ・学生の召命であると考えます。大学生として、学ぶことに召されている気がします。(教育 3 年)
- ・神様が私に用意してくださっている使命や仕事をするために、必要な知識や技術を得ること。そもそも世界中に学べない人が多いなかで、学べることは神様からのめぐみ。そのめぐみをせっかく与えられている者はがんばって学んで活かしていく必要があると思う。(生物 1 年)
- ・世界の中で限られた人にしか与えられていないチャンス・使命・責任。(国際関係学、4 年)
- ・管理に答えていくための備えであり、神様に仕えていくこと(大宣教命令としても)に用いられる可能性があるため、個人のものではない。(経営 4 年)
- ・社会で働くことにつながることで、勉強も主に仕えることだと思っている。(看護 4 年)。
- ・科学を学べば学ぶほど、神様のすばらしさがわかる。(未定 1 年)
- ・人生を豊かにする。神様をもっと知る、神様の造った世界をもっと理解する手段の一つ。(福祉 2 年)
- ・自分の専門分野を通して神様の偉大な御業を知ること。専門分野を通して世界を変えていくこと。(心理 2 年)
- ・「聖書の読み方」の幅が、学ぶことによって広がるのではないと思う。神様が造られたこの世界をさらに知っていききたい。(物理 1 年)
- ・神さまがつくられ、私たち人間に委託された世界を知ること(正しく管理するために)、また神さまご自身を知ること。(言語 4 年)
- ・学びは欲求であるべき。(理 2 年)
- ・学ばなければいけないことは聖書にも書かれているけど、自分が自分から学びたいと思うときに学ばばいいと思う。(看護 3 年)
- ・好奇心が満たされる。(農 1 年)
- ・新しい発見があると楽しいけど大体は苦痛。(人間科 1 年)

- ・具体的には分からないけど、大事であることは分かるから、勉強は必要だと感じている。(英語2年)
- ・生きていくために必要。(保育3年)
- ・就職のための手段。(保健3年)
- ・クリスチャンとしての責任があるように、大学生になれた者としての責任があるように思う。大学生になれた者として、私たちは世界に働きかけよりよい社会づくりのために貢献すべき。だがそれは自分のために働くのではなく、その場に遣わしてくださった神様のために最善を尽くすという形で。(理工3年)
- ・何かを学ぶことは人間としてとても自然なことで、学びたい、知りたいと思うのが人間だと思う。(社会2年)

④その他、あなたが現在学ぶことに関して悩みを持っているなら教えてください。

- ・全然学びが足りない。もっともっと学びたいが時間が足りない。(物理1年)
- ・受験勉強のシステムに不満。主に偏差値教育で社会に役立つスキルが身につかない。(福祉2年)
- ・目的が見つからない。(美術4年)
- ・自分の人生を上から見たとき、大学の4年間は全体としてどのような意味をもつのか。モラトリアムな期間に過ぎないのか。(物理1年)
- ・今の学問は神が選んだものなのか、自分の意志で決めてしまったのか分からない。(建築4年)
- ・将来につながるかもわからず、興味も持てない科目への学習意欲がなくなっている。(生物1年)
- ・学ぶことへのモチベーションがもちにくい。(看護4年)
- ・周りが授業中にうるさかったり、携帯電話で遊んでいると、それが連鎖して勉強するのが嫌になる。(言語2年)
- ・大学は研究機関であって研究するところである。しかし、将来研究職につける人はほんのひとにぎり。なぜ自分が大学で研究するのが分からない。(物理1年)

- ・学ぶことの聖書的世界観が分かるようで分からない。(看護 4 年)
- ・学び、サークル、教会、バイト・・・などのバランスが難しい。(生物 1 年)
- ・聖書を読むか、勉強をするか迷う。(心理 3 年)
- ・何のために学ぶのかが分からない。単位をとる以外に大学の勉強の意味がもてない。(法 4 年)
- ・「主の栄光を現すため」という表現をよくクリスチャンのなかで耳にする
が、具体的にどういうことなのか全然分からない。それを思っ
て学んでいるので辛い。「楽しいからやる、興味があるからやる」
ではだめなのか。(物理 1 年)
- ・クリスチャンの教授・研究者が少ない。もっと増えて欲しい。(言語 4 年)
- ・履修している授業を学んでいる間は、その授業の知識をある程度は蓄え
られる。しかし、その授業のテストが終わり単位を履修した後も、その授
業で得た知識を授業が開講されていたときと同じ位のレベルまで保つこと
は難しい。必ず何かは忘れていってしまう。それを考えると結局、その時
得て忘れてしまう知識は使い捨ての知識で単位を履修するためだけのもの
だったのかなと悲しくなることがある。(経済 3 年)

②「学ぶこと」の意味について、これまで聖書的な意味を教えられたこと
がありますか？

- ・ある…91
- ・ない…68
- ・無回答…19

クリスチャン学生への「学問のすゝめ」

上智大学文学部教授

大塚 寿郎

はじめに

自分はなんのために学んでいるのか。学生だったら誰でも一度は問うことではないでしょうか。かくいう私も例外ではありません。かなり昔の話になりますが、学部の学生だったころ、この問題についてクラスの仲間と真剣に論じあったことをいまでも思い出します。それこそ顔を赤らめたくなるような熱い議論を戦わせたものです。世の中で「役に立たない」といわれている文学を学ぶことにいったい何の意味があるのか、必死に答えを探そうとしていた気がします。半面、大学で学ぶのは就職をするためだ、と割り切っているところもありました。また、学びそのものに面白さを感じていたのも事実です。思えば、大学時代の大半をこんな分裂状態で過ごしたように記憶しています。

とはいえ、いまは「役に立たない」といわれている学問を生業としているのだから、卒業までに答えを出せたのだろう、そう思われるかもしれませんがね。ところが正直なところ、答えといえるようなものにたどり着くにはずいぶんと時間がかかりました。いや、かかっている、と言ったほうが正確かもしれません。

学部時代にクリスチャンではなかった私は、まずキリストと出会う必要がありました。いま自分がやっていることの意味は、神の計画のうちにイエスとともに歩む人生の大きな文脈でとらえなければ見えてこない、ということをまず知らなければならなかったのです。さらに、神の計画は、生きてくなかで少しずつ、ときに思わぬ形で、明らかにされてくるという経験もしていくことになります。ですから、たとえ神の意図がすべて分からなくとも、いま、ここに置かれていることに意味があるということを確信し、与えられていることを忠実に行うことの大切さをいまでも学ばされています。

みなさんはクリスチャン学生として、それぞれ大学、短大、専門学校という学びの場にいま置かれています。これもけっして偶然ではありません。学生時代は、社会という本番舞台に上がる前の準備期間という見方もできますが、神の計画のなかでは、学生であるいまも本番なのです。学生という立場でキリストと歩む人生の本番を生きているのです。ですから学問をする意味を問うことは、クリスチャンとしていまを忠実に生きるための責任である、ということもできるでしょう。そして、これから述べるように、問うことから学問がはじまるのです。

主体的になること

毎年入学してくる多くの学生にとって最初にして最大の難関はゴールデンウィーク明けにやってくるようです。昔から「5月病」という言葉がありますが、この時期は一種のカルチャーショックを体験するときなのかもしれません。原因はいろいろと考えられます。はじめて家族から離れ、ひとり暮らしをはじめるとはさぞかし心細い思いをすることでしょう。規模の大きな大学では、これまでのようにお互いの顔が見える環境と違って、まるで大きな波にのみ込まれてしまうように感ずる、そんな経験をする人もいるかもしれません。入った学校や選んだ専門への期待と現実のミスマッチに悩む人も珍しくありません。入学早々、複雑な履修のシステムを理解し、数ある講義のなかから必要なものや学びたいものを選択し、独自の時間割を組み立て、登録する。これをすべて自分でやらなければならないのも不安でしょう。みんなが一斉に同じことを学ぶ中学・高校のカリキュラムとは違い、ばらばらの授業を寄せ集めたようで、自分がいったい何を勉強しているのか、いまひとつつかめない。そういう声も聞きます。

大学での学びのつまずきの原因のひとつは、この時期に学びに臨む姿勢の転換がはかれないことにあります。いま大学に通っている学生のみなさんは、中学・高校をとおして望みの大学に行くことを目指して受験勉強してきた人がほとんどでしょう。入試の多様化によっていわゆる受験勉強

をしなかった人や、専門学校に進学した人も、よい成績をとって卒業する努力をしてきたはずです。いずれにしても、決められた科目を勉強し、与えられる情報を一生懸命覚え、テストを受ける。これを繰り返してきたのではないのでしょうか。学ぶ目的と道筋はあらかじめ決まっており、自分で考える必要がなかったのです。

ところが大学に入ると様子がいっぺんに変わります。すべてが自己責任になるからです。1年生の早い段階で新しい学びの姿勢への転換をすることができず、落ちこぼれる学生も少なくありません。最近どの大学でも高校生が大学生になる手助けをする初年次教育に力を入れはじめているのは、このためです。また、この時期を無事に乗り切った学生のなかにも、3・4年になっても中高時代の勉強のスタイルから転換できない人がいます。こういう学生は成績も決して悪くありません。与えられた課題をこなし、それなりに勉強しているからです。成績の良し悪しに拘泥するものの、そつなく卒業し就職していきます。反対に、サークル活動とバイトに精を出し、「楽勝コース」をうまく選びながら、かろうじて単位を取得し卒業していく学生もいます。また、勉強以外の活動が忙しくなりすぎ卒業を逃してしまうケースも残念ながらあります。すべて自己責任ですから自由なのですが、いずれの場合も大学での学びの喜びや醍醐味を味わっているかということ、大きな疑問符がつきます。

大学での学びの鍵は主体性です。高校までの学びと大学での学びの姿勢の大きな違いがここにあります。ここでいう主体性とは、自分なりの問いをもち、自分で答えを求め、それを体系的に自分の興味と結びつける態度のことです。これが高校までの「勉強」と大学での「学問」を区別するものです。なによりも、問いをもつということがポイントです。「学問」とは、文字どおり「問い」を立てて、それについて「学ぶ」ことだからです。専門によって勉強や授業の形態は異なるかも知れませんが、口移しで与えられた知識をノートにとって暗記し、与えられた問題をこなし、テストで確認する、このような勉強とは違うのです。自分が問いをもたなければ学問ははじまりません。学問の場である大学は、専門的な知識を与えてもらう

ところであるだけでなく、学問の方法を身につけ、問いに対する答えを見つける訓練をするために主体的に利用するところであると考えべきです。

こう考えると授業への取り組み方も変わってくるはずですが、教員の側から言えば、典型的な週1回の講義で学生に教えられることはきわめて限られています。教室で与えられるものは、そこから自分が興味を引き出し、さらにその上に積み重ねていくための土台やきっかけとなるものです。学生に問いを見つける糸口をつかんでもらい、より深く広い学びへとつなげていってもらうことを期待しているのです。教師はそれぞれの分野のエキスパートですから、学生は自分の学問のためにその知識や技術を利用させてもらうわけです。

教員と同じように、学校に備えられているさまざまなハードやソフトも利用するものなのです。通常の大学には、大きな図書館、研究所、実験室、AV施設、各種データベースなどが揃っていて、学生が自由に利用しているようになっていきますし、その使い方についてのガイダンスもかなり丁寧にしてもらえるはずです。自分の立てた問いへの答えを求めるためにこうしたものを活かすことなく、ただ土台やきっかけとして与えられた限られた知識を覚え、単位を取るだけで満足してしまったり、ましてや友達のとったノートをコピーして試験をパスするだけでよしとしてしまったり、学問をしたとはいえません。新しい知識を自分のものにする面白さは多少なりともあるかもしれませんが、わくわくするような学問の喜びを味わうことはないでしょう。

1・2年生のときにはまだ自分なりの問いが生まれてこないかもしれませんが、でも焦ることはありません。4年生で卒業論文を段階になってはじめて自分のやっていることが見えてきて、その面白さがわかってきたという学生も少なくないのです。大切なのは問題意識をもちつづけることです。学びのために与えられた時間をどう過ごすかは各自に委ねられているのですから、もし大学がつまらないと思ったら、その原因の大きな部分を占めているのが自分かもしれないのです。

さて、主体性こそが大学で学ぶうえで鍵となるものだということが分かったとします。でも、それがクリスチャンであることと関係があるのか、疑問に思うかもしれませんね。これが大いにあるのです。それは、なんのために学ぶのか、という問いと切り離せないからです。主体的であるためには目的がはっきりしなければなりません。どこの大学でも初年次教育に力を入れはじめたことに触れましたが、実際行われていることの大半は、受け身ではなく主体的に学ぶ方法を教えることではないでしょうか。たとえば講義の聞き方、ノートの取り方、問題設定の仕方、発表のコツ、論文の書き方などです。方法（how）を教えてはいますが、学ぶ目的（why）については教えていないのです。教えられないからです。これは個々の学生が自分で見つけるものなのです。

この目的にそれぞれの学生の価値観があらわれます。自分が学びをしているのは、よい職に就くためでしょうか。それも重要です。興味があって面白いから。大いに結構。でも自分だけの利益を超えたなにか大きな目的はないのでしょうか。たとえば世の中の役に立つから。それもすばらしい。しかし、さらにもっと大きな存在とのかかわりのなかに目的を見いだせないでしょうか。ここに自分の信仰とのかかわりが出てくるのです。この点については、あとでもっと詳しく述べることにします。

批判的（クリティカル）になること

ここまで主体的に問いをもつことが大切であると述べましたが、このことは大学で学問をするうえで大切なもうひとつの点につながります。それは、つねにクリティカルな態度をもつことです。「クリティカル・シンキング」とか「クリティカル・リーディング」という言葉を耳にしたことがあるでしょうか。クリティカルというのは「批判的」という意味ですが、なんでもかんでも反対するというものではありません。簡単に言えば「ほんとうにそうかな」と疑ってみる態度のことです。人の言うことをそのまま鵜呑みにしては、クリティカルになれません。クリティカルになるためには、やはり主体性が必要になるのです。クリティカルに人の話を聞き、クリティカルに文献を読むことが主体的な学問には欠かせません。

ことにポストモダンと呼ばれる時代にあつて、クリティカルであることが学問をするクリスチャン学生にますます重要になってきていると感じています。学問の世界は、大きな可能性を広げてくれると同時に、クリスチャンにとってのリスクも孕んでいるからです。

現代の高等教育機関には相対主義がはびこっています。真理はいくつもあるとあって、普遍的真理を主張することは知的でないと断じられるような傾向があります。それどころか「知」そのものが権力の道具であるという論さえ耳にします。特定の価値観を絶対とすることは政治的権力に結びついているという主張です。聖書的な価値観はこうした考え方式に対立するものとされ、学問の世界では知的であることと信仰は相いれないとする風潮が見られます。多くの学校では、そうした価値観を土台として授業が行われているのではないのでしょうか。奇蹟を信じる信仰などは非科学的で時代後れであると批判されたり、人に言われずとも、自分の考えが偏狭に思え、そのことに罪悪感さえ覚えたりしたことはありませんか。あるいは、信仰とはプライベートなものであって、客観的な学問の世界とは切り離して考えるべきものだ、という考え方がもっともらしく聞こえませんか。

そんな環境のなかに置かれると、信仰が危機にさらされることがあるのです。葛藤を避けるため、クリスチャンとしての自分と学生としての自分を切り分けてやり過ごしている人もいるのではないのでしょうか。信仰と学問を生活のなかで別のカテゴリーに属するものと考え、知らず知らずのうちに教会やKKGの活動をする自分と学問をする自分を使い分けているのです。このような状態に葛藤を覚えているならまだしも、それがあたりまえになってしまうなら、信仰の成長がないばかりか、危機にさらされても不思議ではありません。また、このようなアイデンティティーの分裂は、将来、社会に出てからも引き継がれていってしまいます。

クリスチャンの学生は葛藤したらいいのです。主体的にその葛藤に向き合うとき、クリティカルな問いが生まれるからです。そしてそれが学問の出発点となります。ただ教えられることを漫然と受け入れるだけの勉強は、

ある意味で楽かもしれませんが、学問とはいえません。教えられていることにクリティカルになるべきです。知識の量も比べものにならず、長年研鑽を積んできた専門家たちの論にとても対抗できるとは思えないかもしれません。でもクリティカルに見れば、いろいろ問いが浮かんでくるはずです。そもそも「複数の真理がある」という主張自体ひとつの普遍的な真理の提示であって、自己矛盾ではないか。また「知的」という尺度はどうでしょう。なにをもって「知的」とするのか。それもひとつの価値の絶対化ではないのか。あるいは「科学的に」と言われたとたんに、そうでないものは否定されるように感じてしまうかもしれませんが、これもひとつの尺度であって、ある価値観に基づいていることは明らかです。科学信仰といってもいいでしょう。こうしたことは、たとえば思想の歴史をひろく学ぶことによって見えてきます。

もう少し具体的にということであれば、進化論の問題はどうでしょう。このブックレットのためにK G Kが行ったアンケートでも、大学で進化論が当然のこととして教えられていることに疑問を持っている人がいることがわかります。中学・高校の生物の試験で進化論の問題が出たらどう答えるかで悩んだ人は多いのでしょうか。勉強の成果を測るテストで「正しい」とされる答えを書かなければならないからです。でも学問としてどうでしょう。まず進化論が論としてどんなことを主張しているのかを知ることが大切です。はたして科学的精査に耐えうる論なのか検証してみるのもいいでしょう。さらに進化論的な発想がただ生物学のなかだけでなく、世の中のさまざまな思想や価値観に形を変えて入りこんできた歴史を学ぶことも重要です。それが資本家の労働者搾取の正当化や民族浄化の理論として用いられたことも分かってきます。論としての進化論をしっかりと学んだうえで、問いを立て、聖書の光に照らして、進化論なるものがほんとうに説得力のあるものなのか、それを無批判に受けいれていいのか価値判断を加えていく、これがクリスチャンの学問です。進化論を学んでクリティカルに研究するということと、それを鵜呑みにするということは別なのです。

ちなみに、クリスチャンは、この世の価値観だけでなく、信仰に対してもクリティカルな態度をもつべきです。「使徒の働き」17章でパウロはベレヤのユダヤ人たちに福音を説きます。パウロはキリスト者となる前に当時のユダヤ人にとって最高の学問を身につけた人でしたが、聞く側の人々も「学問」をする人たちでした。「このユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりにどうかと毎日聖書を調べた」(11節)とあります。彼らは信仰に対してもクリティカルであったことが分かります。「そのため、彼らのうちの多くの者が信仰に入った。その中にはギリシアの貴婦人や男子も少なくなかった」のです。当時「知」を誇っていたギリシア人もクリティカルにパウロの述べたことを調べることで信仰へと導かれていきました。また、誤った教えに導かれられないためにもクリティカルな態度は欠かせないのです。

キリスト教は信仰の問題であって、学問と関係が薄いと考えられがちですが、クリティカルな視点をもつことはクリスチャンにとってとても大切なことです。だから学問することに意味があるのです。主体性をもって学問をするとき、このクリティカルな視点が養われるからです。学問をする態度を学生のときに身につけることはクリスチャンにとって大いに意味があることなのです。

自分の召命 (Calling) を自覚すること

それでも自分の信仰と大学で学んでいることのどこが具体的に結びつくのか分からないという人もいるかもしれません。そもそも学んでいることと信仰が結びつくということはどういうことでしょうか。牧師や宣教師にでもならなければ、自分の学びと信仰が直接結びついていないのでしょうか。そう考える人は、学生は学問をするために召されているということを確認したらよいと思います。人生を神の大きな計画の文脈のなかで、いま、ここに置かれている意味をあらためて考えることです。

まず、学問に集中できる場所と時間が与えられているのは特権です。たしかにみなさんがいまの学校に入れたのは一生懸命受験勉強した結果で

しょう。また親の経済的な支えがあるから、あるいは自分で学費を稼いだからかもしれません。なにより自分で選んだ道だからでしょう。たとえそうだととしても結果は同じです。講義を受け、実験を行い、本を読むために集中的に使える場所と時間を与えられていることは特権なのです。広く世界に目を向ければ、いかに自分の置かれている環境が恵まれたものであるかが見えてくるでしょう。日本、そしてK G Kの交わりのなかだけで考えてみると大学や専門学校に行っていることがあたりまえであるかのように錯覚してしまうかもしれません。でも世界全体でどのぐらいの人が学問に集中できる環境を与えられていると思いますか。現在日本の大学進学率は50%程度です。アメリカや韓国のようにさらに高い国もありますが、ごく一部の若者しか大学へ行く機会のない国が大半なのです。学生であることは特権なのです。

そのような特権を与えられているのは、学問をするように召されているからだ、ということもできます。こう言われると、「自分は学者になるわけではない」と反論したくなるかもしれませんね。あるいは「いや、自分にはそんな意識はない。大学に来たのは将来に備えるためにであって、いい就職をしたいからだ」と答える人もいるでしょう。でも、いま自分が学ぶ特権を与えられていることは偶然なのでしょうか。人生のすべてが自分のものではなく、神の御手のうちにあることを信じますか。いま学生であることも神の目的があることを信じますか。それは、キャンパスという伝道の場に遣わされているということもありますが、大学はまずは学問の場であるのですから、学問をすることが学生の召しなのです。

では、どうして学問するように召されているのでしょうか。いくつか考えられることを挙げてみましょう。まず、クリスチャン学生は、やがて社会に出るための訓練のために召されているのです。専門の知識や技術を身につける訓練だけにとどまりません。それも社会に貢献するために必要なことですし、大学や専門学校での学びの目的のひとつです。それとともに、先に述べたように、信仰をもって主体的・クリティカルに生きる訓練をされるわけです。このような生き方をするのは学生時代より社会に出てから

のほうが難しくなります。ですから、ここまで述べてきたような学問の姿勢をしっかりと身につけることは、クリスチャンとしてこの世で生きていくうえで重要な意味をもちます。その訓練に集中できる場所と時を特権として与えられ、学生としていま召されているのです。これをただ就職の準備の場にしてしまうのは、なんともったいないことでしょうか。

また、キリストの教会は——そして世界は——どんな分野においても、主体的に問いを立て、クリティカルに考える人、キリストの光に照らして世界について学問する人を必要としています。文学、物理学、社会学、経済学、医学、芸術など分野を問わず、信仰の目で神の創造した世界を理解し、それを言葉にできる人たちです。それは広い意味での神学といえるかもしれません。どんな学問にしても神と神が創造された世界についてより深く理解するためのものだからです。そして、これらの学問をとおしてキリストの証人となる人を教会は必要としているのです。「あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしておきなさい」(1ペテロ3:15)というみことばの実践です。学問をする者は、そのような証人として召されているのです。

さらに、神はわたしたちに喜びを与えるために召してくださっているのです。学問の喜びのひとつは、一見ばらばらに見える現象のなかにつながりを発見することだと思います。文学をとおして、読んでいる作品のなかにこれまで見えなかった意味のつながりが見えたとき、いままで分からなかった因果関係が実験をとおして明らかになったとき、歴史の出来事の隠されたつながりが浮かびあがってくる時、生物学や医学をとおして人体の不思議なしくみを発見したとき、まったく関連性がないと思われていた現象の間に宇宙の起源の一端が垣間見えたとき、学問する者は喜びを感じるのです。

どうして喜びを感じるのでしょうか。こうした発見が何かの役に立つからでしょうし、達成感もあるでしょう。しかし、それよりももっと深い理由がありそうです。そもそも人間がもつ「知」への欲求は、つまるところ「知」の源である神への求めだからではないかと思えます。墮落によって人間の

「知」はダメージを受けました。神の創られた秩序を見失ってしまったのです。クリスチャンにとって学問は、それをふたたび認める営みといえるかもしれません。イギリスの17世紀の英国詩人ジョン・ミルトンは「教育の目的は、つまるところ、人類最初の親たちが壊してしまったものを、神を正しく知ることによって修復することである」と述べています。18世紀のニュートンの学問は神学議論でもありました。科学をとおして法則を見だし、この宇宙が無秩序でないことを証明し、神の存在を確認したのです。現代の学問のなかには、世界に秩序を認めず、ばらばらに崩壊させてしまおうとするものもあります。そこに満足感があるとすれば、それはおのれの「知」の優越性を誇る人間の傲慢さからくるものです。そのような学問には喜びはありません。キリスト者にとっての学問は、神の「知」による創造の秩序をあらためて見いだすことであり、そこに喜びがあるのです。また、この喜びを人に伝えることも学問をする者の使命なのです。

話がずいぶん大きくなってしまいました。そろそろこの辺で閉じたほうがよさそうです。いまここで挙げたことは、クリスチャン学生にとっての学問の目的のすべてではないこと認めなければなりません。目的はそれぞれが神から教えていただくことだからです。なぜ文学を学ぶのかについて真剣に悩んだ自分が、キリストとともに歩み、問い続ける（学問する）なかで、神によって少しずつ明らかにしていただいたことをお分かちしたにすぎません。これをそのまま鵜呑みにしないでいただきたい。クリスチャン学生のみなさんには、ぜひクリティカルな態度をもって自分自身で問うてもらいたいのです。そうすれば神が答えを与えてくださるはずですから、いまみなさんが置かれている学びの場で真剣に「学問」することをおすすめするのです。

聖書から考える「学ぶことの意味」

～「キリスト者の知性」を育む～

キリスト者学生会関東地区主事

鎌田 泰行

はじめに：なぜ、この学校で私は学んでいるのだろう？

「自分はなぜこの学校で勉強しているのだろう？」こうした問いを友人に投げかけられたら皆さんはどのように答えますか。あるいはこれを読んでいるあなた自身がこうした問いを今持っているかも知れません。

このブックレットを準備するにあたってアンケート調査を実施しました。その中でも「『学ぶこと』の意味について、あなたはどのように考えていますか？」という問いを入れました。半分以上の方がその聖書的な意味を教わったことがあり、そうした思いを持って学びと向き合おうとしていることを大変頼もしく思いました。その一方で、自分が今なぜこの学校で学んでいるのか、ということの意味を見出せず葛藤している人も少なからずいるのではないのでしょうか。

「学ぶことの意味」は日本の教育制度の中では考える機会も少ないように思います。小学校、中学校と義務教育を経て、高校や大学にも半ば義務教育のように「みんなが行っているから自分も行くものだろう」と明確な目的意識を形成する機会を持たずに「流れ」で進学しているという状況もあるでしょう。また、学ぶためにというよりは就職のために必要なステップの一つとして進学している人も多いのではないのでしょうか。もちろん、大学での学びには卒業したあとの仕事に備えるという側面があるのは事実です。しかし大学において学ぶことには就職対策以外の豊かさや意味もあるということが見逃されやすいのではないのでしょうか。

では、クリスチャンが大学（あるいは短大、専門学校、高専、大学院以下大学）で学ぶことの意味はなんのでしょうか。それは（１）今神様によって遣わされた場所で、（２）神の国の福音を世界管理のわざを通して宣べ

伝えるため、(3) キリスト教的世界観に根ざした知性を育むことだと考えます。

I. 神に遣わされて

まず、今いる大学で学んでいることの意味は、そこに神様によって遣わされているからであるということを考えてゆきます。みなさんは今いる学校にどのような経緯で入学したのでしょうか。第一志望の学校に入学できて、自分がやりたいと願っていた学びを出来ている人もいれば、成績や家庭の事情などで願っていた学校や学部に行けなかったという人もいるでしょうし、希望した学校・学部に入學したもの、自分が想像していたのと違って困惑したという経験をしている方もいるでしょう。しかし、今自分がいる場所は、様々な人間の状況を通して神様が遣わされている場所であるという視点を聖書は与えてくれます。

ダニエル書では「自分たちが願っていた場所に行けなかった」体験をした若者たちが登場します。ダニエルと、その友人であるハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤです。ダニエルたちはユダ王国の王侯貴族階級出身の若者たちでしたが、バビロンによってユダ王国が侵略された時、捕囚の民として連れ去られました。そして異国の地でその信仰と文化を奪われ、異邦人の王の宮廷で仕えるために3年間にわたる教育を受けることになります。

この体験をダニエルたちはどのように受け止めたのでしょうか。もとよりこのバビロン捕囚は神様が反逆を続けるユダ王国に対する裁きとして起こされたことでした。ですから、この若者たちは神様に対する怒り、罪の自覚から来る落ち込み、バビロンで教育されることへの反発やあきらめといった感情があったのではないかと想像されます。

しかし、ダニエルたちはそうした感情にとどまるのではない行動を選択します。代わりに彼らはこの異国の地において神様とともに歩み、神様に従ってゆく生き方を選びました。怒りや後悔の感情もあったかも知れませんが、彼らは神様に立ち返り、赦しをいただき、過去を忘れずともそれに囚われないことを選び、神様の栄光を求めて歩んでゆくという決断をしました(参考:ピリピ3:13、14)。そうした態度は彼らが異国の食事

とどう対応したかに現れます。ダニエルたちは神様の前に自分の身を汚さないため、王の食べるごちそうを食べたり王の飲むぶどう酒を飲んだりしないと心に決めました(ダニエル1：8)。そして神様がその決断とともにいてくださると信頼しました(ダニエル1：11-14)。

これは決して簡単な決断ではなかったでしょう。私たちはこのあとの話を知っていますが、ダニエルたちは自分たちに神様がどのように応えてくれるかを知りませんでした。事実、彼らの世話をしている宦官の長はその結果もしダニエルたちに元気がなかったら自分は罰せられるだろうと恐れしました(ダニエル1：10)。ダニエルたちにも同様の恐れはあったことでしょう。しかし彼らはそれでも今おかれている場所で神様のために生きることには立ち続けました。

こうした態度をK GKでは「派遣意識」と呼びます。これは、今自分がいる場所は、それまでの経緯はどうあれ、神様が摂理の中で自分を遣わしている場所であり、私たちがへりくだって神様を呼び求める時、主はともにいてくださり、ご自分の栄光を私たちの人生を通して現されるという信仰の姿勢です。ダニエルたちの姿勢もまさにそうだったのではないのでしょうか。

果たして、ダニエルたちの信頼に神様は驚くべきかたちで応じてくださいます。バビロン王のごちそうやぶどう酒には触れなかった彼らは野菜と水だけで十日間にわたって生活しますが、十日の終わりに彼らはほかのどの少年たちよりも健康でした(ダニエル1：14-15)。主はさらにダニエルたちを用い、彼らの信仰と忠実によって、異邦の王たちが神様の御名を誉め讃えるようになりました(ダニエル3：28-30、4：34-37、6：25-27)。さらに、ダニエルの命をクロス王の元年まで長らえさせ、バビロン捕囚の終焉を目撃するという特権も許されました(ダニエル1：21)。バビロンにいることはダニエルたちにとって「第一希望」からは遥かかけ離れたものでした。しかし、ダニエルの忠実を通して神様がほめたたえられ、ダニエルも栄誉を受けました。

自分にとって不都合な場に置かれたとき、私たちはなるべく早くそこか

ら抜け出したいと考えてしまいます。しかし、ダニエルはそこにとどまり、忠実に神様に仕えてゆくという歩みを選択しました。それによって異邦人たちは神様を主と告白したのです。

今あなたは自分がいるところに納得がゆかないかもしれません。しかし、実はその場所で人々が「イエスは主である」と告白するために神様はあなたを遣わしているのです。

なによりも、イエス様のことを考えたいと思います。イエス様は私たちの救いのため、天から地上に来てくださいました。主の地上での歩みには危険と不都合が溢れ、多くの苦しみもあり、最後は十字架の上で死なれました。傍目から見ればまさに苦しいばかりの人生だったでしょう。しかし、イエス様の受難により、私たちの罪は取り除かれ、神様の愛と救いが明らかにされたのです。イエス様の受難を経ない救いの道も理屈の上では考えられます。しかし、主が人となって私たちの苦しみの中に来てくださったということによって、神様の私たちに対するこの上ない愛が示されたのです。

イエス様が私たちのためにどれほどの苦難に遭われたか、またどれほど私たちのことを愛されたか、そのことが聖霊なる神様の力によって私たちの心に届くとき、私たちの心が変わります。そしてダニエルのように、またイエス様のように歩む力が与えられるのです。

イエス様が私たちの救いのためにこの地上に降り立ってくださったように、私たちもまた誰かの救いのために今いる場所へ遣わされています。そこには様々な困難があり、人の目から見たら大変なことばかりかも知れません。しかし、その中で「御名があがめられますように、御国が来ますように、御心が天で行われるように地でも行われますように」と祈り始め、神様のために生きる決意をするとき、その状況は全く違った見え方をしてきます。そして「学ぶことの意味」も「神様によって遣わされている」ということの中で新しい意味を持つようになります。

II. 神の国の福音を世界管理のわざを通して宣べ伝える

大学で学ぶことの第二の意味は「神の国の福音を世界管理のわざを通して宣べ伝える」ことであると述べました。このことを「救いの全体像」から考えてみたいと思います。

「救いの全体像」とは聖書全体を通して語られる救いの物語のことです。ここで物語というのは「つくりばなし」という意味ではありません。この言葉の意味するところは、聖書とはいろいろな著作が意味もなくいっしょくたにされている書物ではなく、明確に起承転結の展開が全体としてあるということです。

聖書を通して語られる救いの物語は様々なかたちで要約されてきました。KGKでは特にこの物語を四つのまとまりに従って要約してきました。その四章とは創造 (creation)、墮落 (fall)、回復 (あるいは贖罪 redemption)、完成 (あるいは終末 consummation) です。それぞれのまとまりは以下のようなメッセージを持っています。

創造：すべてのものを神様が創られた。それはみなよいものであった。

墮落：すべてのものの管理を任されていた人が神様に反逆した。すべてのものが墮落した。

回復：すべてのものにキリスト・イエスを通しての救いが開かれている。

完成：この贖いのわざは完成しており、完成しつつあり、やがて完成する。

創造

「創造」ではこの世界の成り立ちが語られます。具体的には創世記 1、2 章が「創造」の章にあたるといえるでしょう。神、人といった主な登場人物が現れます。この世界がどのような目的を持っており、人はその世界においてどのような位置付けを持っているのかということも語られます。他に「創造」について触れている箇所は聖書全体にちりばめられています。たとえば詩編 139 篇などは人がいかに造られたかについて詳しく述べています。

創世記 1 章では、まず神がこの世界を造られたと言います (1 : 1)。

読み進めるとこの世界が順番を追って秩序立てて造られてゆくことがわかります。また、「それを見て良しとされた」という表現が繰り返されます。「それを見て良しとされた」が5回繰り返され（1：4、10、12、18、25）、最後に「それは非常に良かった」とまとめられます（1：31）。さらに神様は折々に世界に祝福を宣言されます（1：22、28、2：3）。こうしたことからこの世界は、神によって造られた、秩序ある、非常に良いもので、神様の祝福のもと存在しているものだということがわかります。また、人についても多くのことが語られています。人について述べている重要な箇所は創世記1章26節から28節です。

神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をほうすべてのものを支配するように。」神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をほうすべての生き物を支配せよ。」

ここで注目したい言葉は「神のかたち」です。「神のかたち」という言葉の持つ意味は非常に広く深く教会の歴史の中でも詳細に論じられて来ましたが、この「神のかたち」ということばの一つの特徴は神と人との間に共通性があることを思わせる表現だということです。神はどういったお方でしょうか。まず、すべてのものを造られたお方です。次に26節に「われわれ」という表現がありますが、交わりの中に生きられる神です。教会はその歴史の中でこれが三位一体の交わりを暗示していると理解して来ました。さらに神は愛の方で、その愛を豊かにわけあうためにこの世界を造られたということがわかります。

人がどういった存在であるかについて特に三つのことをここから学ぶことができます。第一に人は「神のかたち」を神と共有しているのです。神と交わりを持つことのできる存在であるということです。人は神を知るために造られたのです。第二に、人は三位一体の交わりに生きる神様に倣って、お互いと交わりを持つことのできる存在だということです。人はお互いと

交わりを持ち、多様な構成員からなる愛によって結び合わされた社会を形成するために造られたのです。第三に、人は神の創造性に倣って、神様が造られた世界に創造的な働きかけを出来る存在です。KKG ブックレットである『信仰の土台の再確認』にはこうあります。

したがって、人間に与えられた使命は、神が造られたものをじっと守っていくことにあるのではなく、むしろそれを管理し、そこにある成長する力、発展していく潜在力を伸ばしていくことにあったわけです。そのような「創造的な働き」をするために、人間は造られたのです。(太田和 1999, 18)

こうした人間の造られた目的をもとに「学ぶことの意味」を考えてみたいと思います。人間に与えられた目的を達成するためには「学ぶ」ことが必要です。神を愛し、人を愛し、交わりを持つためには相手がどういった存在であるかを知ってゆく必要があります。また、人は自由で主体的に行動できる存在であることにも気づかされます。人はロボットのようにすることがプログラムされている存在ではなく、自分で考え判断し学習する存在なのです。また、2章19節では神様が人に「名前を付ける」ということを任されています。人はその生き物たちの特徴を掴み、名前を付けて分類しました。世界管理の働きにこうした働きは不可欠です。学問の始まりがここにあると言えるでしょう。

墮落

神様はこの世界を良いものとして造られました。そして全地に神様の愛と真実が広がり、神様がほめたたえられることが創造の目的でした。しかし、その目的に障害が立ちふさがります。

人とその妻は楽園において自由に生きていましたが、ただ一つ禁じられていたことがありました。その禁止の命令が創世記2章16、17節にあります。

神である【主】は人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」

これは有名な善悪の知識の木に関する命令です。この命令にもいくつかの意味があります。まず「取って食べてはならない」という命令は、人と神との間には共通性があるものの、同時に人は踏み込んではいけない領域があることを明示しています。「善悪の知識の木からは取って食べてならない」と聞いて、人は「知る」ことを禁じられているのかとってしまうかも知れません。しかしそうではなく、ただ「善悪の知識」だけが神様の領域なのです。人は善悪を知っている神様のみことばを信頼して生きる存在なのです。人が自分で善悪の知識を得ようとするのは、まさに神から独立して「神のように」（創世記3：5）なろうとする行動なのです。

また、この木の存在は、人に与えられている豊かさを際立たせる働きもありました。制限があることは「どの木からもとってよい」という自由を引き立たせ、感謝へと導く目的があるのです。さらに、この木は「園の中央に」ありました。この木を絶えず目にするによって人は神との関係を確認し、神様を信頼し従ってゆこうという思いを新たにし、感謝することが出来たのです。

残念なことに、人とその妻とは蛇の誘惑に負け、神の命令に背きます。そのことによってこの世に罪と死が入りました（ローマ5：12）。このことを「墮落」と呼びます。知性も墮落の影響を免れ得ませんでした。人の「思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなり」、「自分では知者であると言いながら、愚かな者に」なったのです（ローマ1：21、22）。人は真理を拒むようになり（ローマ1：18、25）、理性的な判断は曇り（ローマ1：26）、善悪も正しく判断できないようになり（ローマ1：28）。神のかたちも知性も使命もなくなったわけではないのですが、全て罪の影響下に入って歪んでしまいました。

「学ぶ」ことにも墮落の影響は出ました。たとえば正確な知識を得たり、考え方を身につけたりすることを重んじない、知性軽視の態度です。これは教会の外でも内でも見られるものです。信仰でさえ感覚的なものと捉えられ、知的な側面が軽視されています。また、学問をしてゆく中で神様を

その思考から取り除く、無神論的前提に立ったアプローチも「墮落」の結果と言えるでしょう。また、真理の探究を目的とすべき学問が時に為政者の考えを押し付けるために悪用されることもあります。さらに、学びを取り囲む諸制度や学びの成果の用いられ方にも墮落の影響は出ています。平和的な目的の研究が軍事利用されるようなこともありますし、世界では学生が単位を得るために教授に賄賂を贈らなくてはならない国もあります。

こうして罪と死がこの世界に入り、知性も学びとそれを取り巻く諸制度もその影響を受けるようになりました。それに対する救いについて次に見たいと思います。

回復

人がエデンの園から追放されることになった時、そこには同時に回復への約束が暗示されました。

わたしは、おまえと女との間に、
またおまえの子孫と女の子孫との間に、
敵意をおく。

彼は、おまえの頭を踏み碎き、
おまえは、彼のかかとかみつく。(創世記3：15)

これは蛇に対して語られた神様のことばです。ここに蛇の頭を踏み碎く女の子孫についての言及があります。この「女の子孫」が誰かということについては、イエス・キリストとする解釈と、イエス・キリストを通して蛇に勝利する救われた人々であるとする解釈が存在します。いずれにせよ、ここに神によって備えられた救いへの言及があります。救い主が来ることは旧約聖書の全体を通して預言され、彼の死と復活を通してこの世界に救いがもたらされました。イエス・キリストによる救いは全ての人に対して、また全被造物に対して開かれているものです。

この救いは最初に使徒たちによって宣言されました。パウロはその宣教についてこう言います。

事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです（第一コリント 1：21）。

この箇所は「クリスチャンは愚かであっても良いのだ」という誤解を招きそうな箇所です。しかし、ここでパウロの言わんとしていることは、この世は自分たちの知恵では神による救いを見出すことが出来ないということです。神による救いを知ることが出来るのはただキリストの死と復活の福音が宣言されることによってのみであるということです。この福音はきちんとした論理的な一貫性を持っていて、それが真実であることを裏付ける数々の証拠を持っています。ですから、クリスチャンは神様がこの福音に自分の心を開いてくださったことを感謝しつつ、この福音のメッセージを正確に理解し、その裏付けを知り、正しく伝えられるように努力する必要があります。

また、キリスト・イエスにある贖いは神のかたちが回復することを意味しています。キリストこそがまことの「神のかたち」です（コロサイ 1：15）。救われたものはキリストのいのちと結び合わされ、キリストに似たものへと変えられてゆくのです（コロサイ 3：10）。人のかたちの回復は、人の使命の回復も意味します。人の使命は失われていなかったものの罪によって歪められました。キリストにある贖いは人がその造られた目的を主にあってより正しく全うしてゆくことを可能にしてくれます。

人のかたちの回復は知性の回復も意味します。パウロは「私たちに、キリストの心があります」と言います（第一コリント 2：16）。ここで「心」と訳されている言葉は原語だと理解、推理、思考、決断に関わる言葉で、英語では“mind”、知性と訳されることばです。ダラス・ウィラード（Dallas Willard）はイエス・キリストこそこの世に生を受けた人の中でもっとも優れた知性をもっていたと言いますが（1999）、このキリストの知性が今や救われた人のうちに御霊により宿っているのです。この知性は神に関する事柄と神が造られたこの世界に関する事柄の両方を把握する力を持っています。

ですから、クリスチャンとして成長することは、知識が増し、また知性を正しく用いられるようになってゆくことを意味しています。パウロは回心した人たちの「愛が真の知識と識別力によって、いよいよ豊かになり…真にすぐれたものを見分けることができるように」なるように（ピリピ1：9、10）、また「あらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますよう」に（コロサイ1：9）と、知識、識別力、知恵、理解力を彼らが持つように祈りました。私たちもまたそのように自分たちのために、また他のクリスチャンたちのために祈るべきです。

完成

神による贖いのわざはすでに完成しており、完成しつつあり、やがて完成するという性質を持っています。これは私たち個人の救いに関してもそうで、またこの世界全体に関してもそうです。

『信仰の土台の再確認』でも触れられているように、私たち個人の救いは「すでに、しつつある、やがて」という性質を同時に持っています。例えば第一ペテロ1：5では「あなたがたは…終わりの時に現されるように用意されている救いをいただくのです」とはやがてくる未来のこととして語られ、同時に1：9では「たましいの救いを得ている」とすでに起きたこととして語られ、そして2：2では「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋なみことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」と救われつつあるという側面が語られています（太田和1995, 41）。

私たちひとりひとりが神様によって救われ、その主権のもとに生きるように、この世界もまた神様によって救われその主権のもとに取り戻されます。この神様の主権の支配を「神の国」と言います。これまで見て来た創造・墮落・回復・完成のストーリーは、神の国の完成が終着点です。

この神の国も「すでに、しつつある、やがて」という性質を持っています。「神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからで

す」(ローマ14：17)とパウロは神の国を信仰者たちの間にすでに現れている現実として語ります。また主の祈りは「御国が来ますように」と神の国を呼び求める祈りです(マタイ6：10)。そしていずれ来るキリストの再臨のとき「あらゆる支配と、あらゆる権威、権力」はついにキリストの足の下に置かれ、御国が父なる神に渡され、神の国が完成します(第一コリント15：23-28)。

教会は神の国が来ることを、福音宣教を通して、また世界管理のわざを行うことを通して宣言します。ここで福音宣教というのはイエス・キリストを通してこの世界に救いがもたらされたという教えを語ることです。一方、世界管理のわざは私たちが創造の最初に与えられた使命のことを指します。

この神の国を宣言してゆくため、クリスチャンは福音を正確に学ぶ必要があります。「むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。」(第一ペテロ3：15)とある通り、いかに神が全人類と全世界の主であるか、その希望の確かさ力強さを知り、それをいつでも伝えられるようになる必要があります。

また、クリスチャンは世界管理のわざを行うため、自分の専門分野についても正確な理解を身につける必要があります。墮落した世界においては多くの誤った知識が氾濫しています。自然科学、社会科学などの分野において正しい知識が広まり、様々な問題に対して思い込みではなく事実に基づいた対処が為されることは、立派な世界管理の働きです。

ですから、正しい考え方や知識を身につける、これこそがクリスチャン学生にとってもっとも重要な「学ぶことの意味」と言えるでしょう。神の国が到来することは神様の秩序がこの世界に回復することを意味します。その秩序には自然法則や人間関係における原則なども含まれます。学問的探究によってそれらの法則・原則が解明され、それに従ったかたちで世の中が運営されてゆくこと、また人間に与えられた理性が正しく用いられることは、それ自体が世界管理のわざを通して神の国を宣言することなのです。

ここまで私たちは創造・墮落・回復・完成という救いの全体像の中で学ぶことにはどういった意味があるかということを追求めて来ました。それは以下のように簡単にまとめることができるでしょう。学ぶことの基礎になる知性や理性は、創造者なる神が私たち人間に与えて下さった「良きもの」でした。しかし、それも罪の影響の故に「悪しきもの」に堕してしまっています。そのような知性や理性さえも、キリストの贖罪の恵みにあずかるとき回復され、「新しきもの」と更新されます。そして、最終的には終末において「まったきもの」として完成をみる希望があります。次に、私たちは具体的に今自分のおかれている学びの場でどのような目的や態度を持ってゆくことが必要なのか見てゆきたいと思います。

III. 「キリスト者の知性」を育む

大学を初めとする高等教育機関においてクリスチャンが学ぶ中で目指したいのは、「キリスト教的世界観（Christian Worldview）に根ざした知性を育むこと」と言えるでしょう。世界観とは何でしょうか。ジェームズ・サイアー（James Sire）によれば、それは私たちが持っているこの世界の成り立ちについての前提の全体を指します（Sire 1990, 31-32）。中には自覚的に持たれているものもあれば無自覚的なものもあるでしょうし、また一貫している部分とそうでないものもあるでしょう。さらに正しいもの、部分的に正しいものとそうでないものも含まれるでしょう。

より馴染みのある言い方をすれば「結局世界ってこうだよ」と私たちが思っていることの全体を「世界観」と呼ぶのです。神はいるのか、いないのか。いるならどういった存在なのか。この世界に始まりと終わりはあるのか。あるならどのように始まりどのように終わるのか。人が存在する目的はあるのか。人は死んだらどうなるのか。善悪はどのように区別できるのか。人はどうやって何かを知ることができるのか。人の、世界の存在する究極の目的は何なのか。哲学や宗教の授業で扱われ、他の分野でも突き詰めて考えてゆくと直面する「問い」たちです。こうした問いはすべて世界観に関する問いです。

またある人は「世界観とはこの世界の持つ『物語』についての理解である」と言います (Keller 2003)。この世界で起きるあらゆることを、人はある世界観、「物語」を通して見て、理解します。例えば、第一次世界大戦より前は「人類は進歩している」という世界観を西洋の人たちは持っていました。特に西洋文明こそがその進歩の最先端を走っているという理解をしていました。現代は逆に「進歩」という考え方は鳴りを潜め、この世界には優れているものも劣っているものもなく、すべての価値は相対的であるという考え方が大勢を占めるようになっていきます。

聖書の教えは「私たちが一体どのようにして神様と関係を持つか」という側面と「世界観」という側面があります。救いの全体像で見てきた通り、聖書は神がどういった方であるか、人はなぜ生きるのか、この世界の究極の目的とは何かという問いのすべてに対して一貫した答えを持っています。またこの世界は創造・墮落・回復・完成という物語の中にあるということ伝えていきます。私たちがクリスチャンとして成長するということには、そうした聖書の教える世界観を自分のものにしてゆくということを意味します。

キリスト教的世界観に根ざした知性とは、そうした聖書の教える世界観から全てのものを見るように鍛錬された知性のことを指します。それを「キリスト者の知性」(A Christian mind)と呼ぶこともできます。「キリスト者の知性」をハリー・ブラマイアーズ (Harry Blamires) は以下のように定義します。

キリスト者の知性とは・・・一般に論争されている課題をキリスト教的前提から考えることができるように鍛えられ、知識が貯えられ、[論争に関われるよう]備えられている頭脳を指す (Stott 1972, 33-34)。

今日世界に存在する様々な課題と教会が取り組んでゆくため、「キリスト者の知性」を育むことは不可欠です。今日経済政策、憲法、沖縄基地問題、領土問題、労働環境、いじめ、原発など、様々な問題が私たちの周りに巻き起こっています。「キリスト者の知性」は、そういった問題を創造・

墮落・回復・完成という物語の文脈で捉え、また問題そのものを的確に理解し、教会、あるいは一人のクリスチャンが何をしてゆくべきかということを考えてゆくのです。

何よりも、「愛する」ためには「キリスト者の知性」がなくてははいけません。ピリピ1：9にはこうあります。

私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり・・・

愛すると聞く時、私たちはなにか感情的な盛り上がり进行を描きがちです。しかし愛とはむしろ「判断」と「意志」なのです（菅家2012）。私たちがよりよく神を愛し、人を愛し、神様の造られたこの世界を愛してゆくには知性を育む必要があるのです。そうしてキリスト教的世界観に根ざし、愛する歩みをしてゆくクリスチャンたちを通して神様は神の国を宣言する働きをこの世界で前進させてゆかれるのです。

「キリスト者の知性」を育むことは困難な道程です。ただ良い成績を修めるため以上の学びをしなくてははいけません。また「右」でも「左」でもない、ただ福音の真理に基づいた歩みは、時に様々な人の誤解を受けいわれのない攻撃を受けることもあるでしょう。

しかし、聖書は言います。「喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。」（マタイ5：12）こうした労苦が決して無駄ではなく（第一コリント15：58）、救いの完成の時には豊かな顧みがあることを憶えたいと思います。

IV. 「キリスト者の知性」を育むために

①へりくだり

それでは、「キリスト者の知性」を育むためにはどうすればいいのでしょうか。第一に、私たちは主の前にへりくだる必要があります。ジェームズ・サイアー（James Sire）はこう言います。

キリスト者の知性は世界観から始まるのではない。キリスト教的世界観か

らすらではない。それはある態度から始まるのである。・・・[その態度は]神こそが神で、私は神ではないという気づきの姿勢である (Sire 1990, 15)。

また、聖書にはこうあります。

主を恐れることは知識の初めである。

愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。(箴言 1 : 7、他 9 : 10、15 : 33、詩編 111 : 10 参照 Sire 1990, 15)

こうした姿勢は最初に見たダニエルにも見られました。

「あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだろうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれているからだ」(ダニエル 10 : 12)

自分は神ではない。神こそ神である、神こそが全ての知識と知恵の源である、そうした神に対する畏敬の念とそれに伴う神の前でのへりくだりが「キリスト者の知性」の出発点なのです。

ですから私たちはまず祈る必要があります。自分の知恵も知識も力も限られているということを神様の前で告白しましょう。知ったつもりになるものの、実は知らないことだらけで間違えることも多いと認めましょう。そして自分の学びのために祈りましょう。良い成績よりも、真理がわかるように、神様の御国のために役立つ学びになるようにと学内やブロック、地区の仲間と祈りましょう。神様が知恵と啓示の御霊を通して知識を与えてくださるように、また学ぶための力を与えて頂けるよう祈りましょう。自分一人で祈るだけではなく学内やブロックの仲間とも祈り合いましょう。

②みことばを学ぶ

「キリスト者の知性」を育むため次に必要とされるのはみことばの学びです。みことばを学ぶことを通して聖書の観点が私たちのうちに育まれてゆきます。

聖書は様々な学び方があります。まず聖書本文を研究してゆく学び方が

あります。KGKの聖研テキストなどはそれを助けるためにあります。また聖書の内容を体系立てて学ぶことも出来ます。いわゆる教理の学びなどがこれにあたるでしょう。KGKブックレットなら『信仰の土台の再確認』が一番近いかも知れません。さらに、聖書がどのように読まれて来たかの歴史をたどる読み方も出来るでしょう。たとえば、「神のかたち」という言葉が教会の歴史の中でどのように解釈されて来たかを学ぶということです。そして何か個別具体的な事柄について、例えば恋愛について、労働について、歴史観について学ぶことも出来るでしょう。KGKブックレットの『イシュとイシャ』などがこれにあたります。

こうした異なった学びのアプローチは、神学校で学ぶ聖書学（解釈学）、教義学、教会史（教理史）、倫理学と大体対応します。自分がいる大学でこうした授業は開講されていないかも知れませんが、よりよく神様を知って愛するには学びを続けてゆくことは不可欠です。学生生活は忙しいでしょうが、社会人になるともっと忙しくなります。今のうちから学ぶことを生活の優先事項としてゆくことをお勧めします。そして学んだことを実践に移しましょう。実践に移したとき、神様のことがばが真実であることを実感することが出来るようになります。

③自分の専門分野を学ぶ

「キリスト者の知性」を育むために次に必要なことは自分の専門分野をしっかりと学ぶことです。楽に卒業することより学ぶことを重視して、自分の専門分野を深みのあるかたちで理解しましょう。例えば研究系の分野だったら、理論や研究法とともに分野の歴史や哲学、研究者の社会的責任について学びましょう。ビジネスなど実際の分野だったら、心理学や社会学など実践の前提となっている学問も学びましょう。さらに選択科目を取るときは自分の専門と隣接するようなクラスを取ってみましょう。もし西洋史が専門だったら西洋文学史や音楽史のクラスを取ってみましょう。それらのクラスが自分の専門に広がりや深みを与えてくれることでしょう。

さらに、その分野についてのクリスチャンによる著作も読んでみましょう。『キリスト教書総目録』(<http://christbook.jp/>)から、自分の分野についての著作がないかを見てみましょう。また今はインターネットを通して多くのキリスト教情報源と出会うことができます。特に英語圏ではどの学問分野でも活躍しているクリスチャンがいます。自分の分野を深められるような英語力をつけてゆきましょう。まず読解・聞き取りを磨き、次に自分から発信できるように書く能力、話す能力を磨きましょう。

また、その専門分野について学ぶ中で神様についての洞察を得ることでしょう。名工の手による作品が作者の品性を反映するのと同様に、神様がどういったお方であるかはその創造を研究することを通して知ることが出来ます。詩篇 19 篇 1 節には「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」とありますが、天や大空が創造主の栄光を、つまりいかに神様が誉めたたえられるべきお方であるかを告げ知らせていると言います。神様の造られた自然を、また人を研究することを通して、私たちは神様がどういった方であるかについての洞察を得ることができるのです。

今日、時に聖書と科学が対立関係にあるかのように扱われることがあります。しかし、聖書が神のことばであり、また神がこの世界を造られたのであったら、聖書を理解しようという最善の営みが導き出す結論と、創造世界を解明しようという最善の営みが導き出す結論は、いつときはあたかも矛盾するようになって見えても、最後には何ら矛盾することはないでしょう。

④交わりの中で学ぶ

クリスチャンとして学ぶ上で次に大切なことは交わりの中で学ぶことです。もし同じ分野の学びをしている信仰の友を見出すことができたそれは幸せなことです。お互いの学びが神様の御国のために用いられるよう祈りましょう。より信仰的な立場から自分の専門分野を見つめるにはどうすればいいか意見交換し合いましょう。また志学会、EMF（福音主義医療関係者協議会）、NCF（Nurse Christian Fellowship）といった同じ分野に関

わる人たちの祈祷会・学び会・リトリートにも参加しましょう。もしまだないのであったら、そうした出会いを探し求めたり、交わりの発起人になったりするのも良いのではないのでしょうか。

⑤自分の専門分野をキリスト教的世界観から批判できるようになってゆく

「キリスト者の知性」が目指す一つの到達点は自分の専門分野をキリスト教的世界観から批判できるようになるということです。批判とは、本ブックレットで大塚寿郎氏が論じているように、なんでも反対するという意味ではありません。私がここでいう批判とは、ある主張を聞いて、それを鵜呑みにするのではなく、学問的・信仰的観点からそれを捉え直すということです。

この小論の前半で私たちは全創造が墮落していると述べました。従って当然学問も墮落して、神様を中心としないありかたに変わっています。今日の日本では研究や教育のほとんどが相対主義的・無神論的な世界観に立っています。クリスチャン自身も墮落の影響を受けていますから、いつでも正しいということはありません。しかし、そうした中で自分の専門分野をよく理解し、深い信仰理解に根ざし、その分野にキリスト教的な立場からアプローチすることがクリスチャンの使命です。そのことによって神の御国が前進するのです。

ジェームズ・サイアー (James Sire) はこうしたことの実例として自分がテクノロジーについてした研究について述べています (1990, 115-138)。私たちはテクノロジーを中立的なもののみながちです。しかしテクノロジーも独自の人間観を持っており、それに気づかないでいると私たちはその人間観や世界観に知らず知らずのうちに足元をすくわれてしまいます。

サイアーはこうした取り組みの第一歩として自らがみことばによって養われていることが大切だと言います。次に、彼はテクノロジーについて論じた本を読み始めました。新聞や雑誌、また知人などを通して知っていた本から始め、学術的な本の後ろについている参考文献一覧を見ることによって、読むべき本を発見してゆきました。さらに大学図書館の図書検索

も利用しました。そうしたことに関心を持っている知り合いとも話してゆくうちに、テクノロジーの倫理について研究しているクリスチャンの学者と出会いました。その学者がカルヴァンクリスチャン学術研究センター (Calvin Center for Christian Scholarship <http://www.calvin.edu/admin/cccs/>) と関わりのある5人のクリスチャン研究者を紹介してくれました。サイアーはこうした学びと出会いを通してテクノロジーについての理解を深め、クリスチャンとしてどうテクノロジーと向き合うかを考えてゆきました。

こうした営みを「キリスト教倫理」とも言います。倫理は複雑なこの社会の中で聖書的な原則を具体的にどう適用してゆくかという問いに取り組むものです。KGKが提供している恋愛・結婚・性についての学びや歴史観・労働観の学びなどはまさに現代の具体的な物事をキリスト教的世界観から捉え直す倫理の営みです。基地問題、領土問題、憲法、などを含む全ての事柄についてクリスチャンが積極的に考えるということを神様は望まれています。

⑥謙遜で忠実な存在としてとどまる

学ぶことの危険は知性が高慢に結びつきやすいことです。「知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を建てます」(第一コリント8:1)とあるとおり、知識は自分が優れているという思い込みを人に持たせます。ここでパウロは知識を否定はしていませんが、知識を得ることに伴う危険も指摘しています。

私たちは自分の正しさばかりを主張したくなります。そしてその正しさが認められない場合、受け入れてくれないグループから離れたくなります。しかし、神様は私たちが愛する者となるよう召してくださいました。たとえ自分の主張が受け入れられなくても、神様がそこにおかれる限りにとどまりましょう。ダニエルも捕囚の始まりから終わりまでバビロンに居続けた(ダニエル1:21)。そうした「忠実な存在」として私たちが難しい状況の中であってもとどまり、神を見上げる姿勢を貫くことを神様は喜ばれるのです。

⑦いつも新たに

「キリスト者の知性」はある程度のところまで行ったら成長をやめてしまうものではありません。むしろ、自分がいつもまだ知らないことがあることを自覚し、知恵を神様に求めつつ成長し続けるものです。さらに、クリスチャン同士だからといって同じ結論に達するとも限らないでしょう。いつも自分には知らないことがあるという謙虚さも持ち続けましょう。また、学校を卒業しても学びというプロセスは続きます。自分の専門分野をフォローしつつ、同時に新しい知識の分野も開拓してゆきましょう。神様を知ることにしても、「いつでももっと神様を知ることができる」ということを憶え、みことばの学びを深めてゆきましょう。注解書や辞典、神学書には積極的に投資しましょう。

⑧大学に遣わされた者として

クリスチャンはその専門分野のみならず、それを取り囲む諸々の制度についてもキリスト教的世界観から積極的に考えてゆく必要があります。具体的には大学や学会のありかたについても批判的に考えてゆく必要があります。学問領域が墮落の影響を受けているのと同じように、学問が行われる大学という制度も墮落の影響を受けているのです。

今大学改革が盛んに叫ばれています。その議論の中にクリスチャンも関わってゆく必要があります。例えば大学は高等教育機関として機能しているのか、大学教育と経済的負担のバランスはどうか、就職活動のために4年間きちんと学ぶことができないという現状でよいのかなどといったことについて、キリスト教的世界観に立つ大学論を発信してゆく必要があります。また個々の大学の中に存在するその学校固有の諸問題とも関わることが求められているでしょう。

⑨「キリスト者の知性」と神の国の福音

こうして各分野においてクリスチャンが「キリスト者の知性」をもって生きてゆくことが神様の願われていることです。これを通して神の御国がこの地上で前進してゆくのです。そして主にある知性に基づいて建てられ

た秩序のもと、人は御国の前味を体験することができるのです。

自分たちが持てる影響は小さいかも知れません。しかし天の国はからしだねのようなものなのです。最初は小さくても、大きく広がってゆく（マルコ4:30-32）ということのを憶えながら、「キリスト者」の知性を育み、クリスチャンとして行動してゆきたいと思います。

そして、クリスチャンとして現代の諸問題に関わってゆくという姿がなによりもの証になるのです。スリランカのIFES主事ヴィノス・ラマチャンドラ（Vinoth Ramachandra）は、現在の世界が抱えている諸問題に対してクリスチャンが誠実かつ知的に考え、ときに未信者とも協力して解決を計ってゆくということが強力な証になると語ります。

また、KGKの初代総主事であった有賀寿はこう言っています。

「学生会」とは・・・学生が<クリスチャン学生である>ことを、聖研・祈り・信仰の実践を通して追求し合う、まじわりのことで・・・そういうまじわりをもつとき、そのまじわりの周囲に・・・<ハプニング>として伝道的結果が生じてくる。この<ハプニング>は神のわざである。（有賀寿 1987, 176-177）

クリスチャン学生が主の前にへりくだって歩み、聖書的世界観を自らのうちに成熟させ、この世界にある諸問題と向き合う時、まことにその人たちは地の塩・世の光として生きることができるようになるでしょう（マタイ5:13-16）。そして世の光として輝くとき、人々は神をあがめるようになるのです。

おわりに

この小論では、あなたが大学で学んでいる理由は、神様がそこにあなたを遣わし、神の国の福音をことばと行動で宣べ伝えられるようになるために「キリスト者の知性」をあなたのうちに育てているからだ、と論じてきました。科学、教育、工学、歴史、ビジネス、医療・・・ありとあらゆる分野でキリスト教的世界観に根ざしてしっかりした知的内容を発信してゆくクリスチャンたちの存在はいつの時代も必要でした。そして不安定さを増しているこれからの時代にますます必要になってゆくでしょう。

こうしてキリスト教的世界観に根ざした「キリスト者の知性」をもったクリスチャンたちの存在は、この世における教会の証をより強力なものにしてくれることでしょう。「キリスト者の知性」を育むことは私たちが「サンデー・クリスチャン」（日曜日だけクリスチャンらしいクリスチャンのこと）になってしまうことを防ぎ、日曜日以外の六日間も信仰に根ざして生活をするを可能にしてくれます。そうした中から教会の外でも信頼されるクリスチャン・リーダーが生まれて来ることでしょう。

最後に、この論文で書いて来たことはなんとも大きなことのように思えるかも知れませんが、現実はとても小さな一歩から始まることなのだというのを憶えたいと思います。たとえノーベル賞を取るような成果を修めなかったとしても、世界管理のわざには十分携わることが出来るのです。「ミスター・チルドレン」の「彩り」という曲にはこのような歌詞があります。

「僕のした単純作業がこの世界を回り回って
まだ出会ったことのない人の笑い声を作ってゆく
そんな些細な生き甲斐が
日常に彩りを加える」

私たちがしている日々の営みは一見この世界に何かもたらしているとは思えないし、「世界管理」というなら何かもっと高尚なことを想像するかもしれません。しかし、神様は私たち一人一人のキリスト者がした小さな作業を聖霊なる神様のお力によってこの世界を歩き回らせて下さって、世界管理の働きをなさって下さるのです。学ぶ時、私たちはもっぱらそれが成績につながったり就職につながったりしなくてはまるで意味がないことかのように思ってしまう。しかし、巡る何かについて正確な知識や方法論を身につけてゆくということそれ自体がすでに世界管理の働きに関わっているのです。

また、大学におけるいろいろな手続きをきちんと行ってゆくことも神様が造られた「大学」の秩序を維持し、世界管理の働きに関わっていることになるのです。そうした営みを通して養われる磨かれた教養・知性や誠実

はかけがえのないものです。「成績」は忘れ去られるものですが、身に付いたものや神様のためにしたことは失われることがなく、神様のために用いられるのです。

ですから、「完成」の光の中、「学ぶ」ということを大事にする歩みが続けようではありませんか。聖書を深く学び続け、自分が委ねられた専門領域についての造詣を深め続けようではありませんか。今遣わされている学びの場を大切にしてください。そして万物の完成の時「よくやった、忠実なわがしもべよ」という言葉をともにいただきましょう。

主要引用・参考文献

* がついているのは「キリスト者の知性」について考える上で特にお薦めしたい書籍です。

『学生の伝道 2010』東京：キリスト者学生会、2010.

有賀寿「<学生>伝道について」『主が建てるのでなければ』.176-181

東京：キリスト者学生会 1987.

Booth, Wayne C.. et al.. The Craft of Research. Second Edition. Chicago: University of Chicago Press, 1995, 2003.

* フランクリン・ステパノ『キリスト教世界観とリベラルアーツ』東京：いのちのことば社、2006.

Hunter, James Davison. To Change the World: The Irony, Tragedy, and Possibility of Christianity in the Late Modern World. New York: Oxford University Press USA, 2010.

*Keller, Timothy J.. “Writing from a Christian Worldview”. 2003. <http://sermons2.redeemer.com/sermons/writing-christian-worldview> (accessed December 15, 2012).

* 溝上慎一『大学生の学び・入門—大学での勉強は役に立つ!』東京：有斐閣、2006.

- 太田和功一『信仰の土台の再確認』東京：キリスト者学生会、1995.
- *Sire, James. *Discipleship of the Mind. Learning to Love God in the Ways We Think.* Downers Grove: InterVarsity Press, 1990.
- *Stott, John R. W.. *Your Mind Matters. The Place of the Mind in the Christian Life.* Leicester: Inter-Varsity Press, 1972, US edition: 2006.
- 菅家庄一郎「宣教師とパートナーシップ」説教、2012年11月25日.
- 内田樹『下流志向 学ばない子どもたち 働かない若者たち』東京：講談社文庫、2009.
- White, James Emery. *A Mind For God.* Downers Grove: InterVarsity Press, 2006.
- Willard, Dallas. "Jesus the Logician". *Christian Scholar's Review*, 1999, Vol. XXVIII, #4, 605-614. <http://www.dwillard.org/articles/artview.asp?artID=39> (accessed December 15, 2012).
- 吉見俊哉『大学とは何か』東京：岩波新書、2011.

大学院進学を考えている諸君へ ～専門職、研究職の使命と未来～

慶應義塾大学商学部准教授／志学会実行委員長
梅津 光弘

注：本稿は、2010年3月に行われたKKG全国集会・分科会での講演に加筆・修正を行ったものです。

私は、高校1年生のころに人生に対してむなしさを覚えました。その後高校1年の7月に洗礼を受け、クリスチャンとしての生活をはじめました。高2の夏には、松原湖バイブルキャンプでもたれた高校生キャンプに参加し、そこで大きな恵みをうけました。その後、慶應義塾大学文学部哲学科に入ったのですが、そのころ教会では哲学などをやると信仰がひからびかねないと言われました。確かに、生半可な勉強は危険であります。研究者は祈ってもらわないといけません。全体像が見えなくなり、サタンに足元をすくわれる恐れがあります。

しかし、もともと学問、すなわち真理の追究は、信仰者が始めたものです。「懐疑的」になることと「否定的」になることは違うのでありまして、そもそも疑問がないと言う方がおかしい。疑問があったとしても、救われているという事実は変わりません。神は大きな方であって、それでも愛してくださるのです。

また、未信者の友人にしっかり説明するためにも理論武装する必要があります。私は最初、哲学を勉強しました。私の通っていた教会の牧師は、明治生まれのガッツのある牧師で、「ただ信ぜよ」ということを強調していました。また、「福音派」は「伝道派」とも言われますが、私も救われて早速実践したのですが、とにかく高校生というものは容赦がないものです。聖書を開き「神はその独り子をたまわったほどに世を愛しておられるんだ」などと言うと、「何を寝ぼけたことを言ってるのか?」「天地を造られた神が…」などと言うものなら、「この前進化論習っただろ!」、「そ

もそも神などいるのか」などと情け容赦ない批判を浴びました。私は悔しい思いをしました。しかし、彼らの言っていることも分かるのです。もちろん、信仰において、疑わずに受け入れるということは大切です。もし「理解」しなければクリスチャンになれないとすれば、頭の良い人しか信じられないことになります。しかし、神はそのような形で救いを宣べ伝えませんでした。これは神の恵みであり知恵であると思います。信仰という点においては、大学に行っていようが行ってなかろうが、学問があろうがなかろうが、関係ないのです。これは実に優れた神の知恵、摂理であると考えます。

とは言え、「神はいるのか」という疑問に躓いている方、あるいは進化論の問題などでクリスチャンになれないと思っている方がいるとしたら、そのような方のニーズにも応える必要があると思われたのです。私たちキリスト者は意味があって、それぞれの学問に導かれたと思います。偶然ではありません。なんらかの導きがあります。その学問を通して、ぜひキリスト教を弁証してほしいのです。

その後、私は渡米し、トリニティ神学校 (Trinity Evangelical Divinity School) の修士課程で、牧師や宣教師のための「神学」ではなく、「宗教哲学」を勉強しました。そこである程度学んでみて、思ったのは、キリスト教は十分に理論武装できるということです (みなさんもぜひ徹底的に、「これ以上勉強できない」というところまで学んでください)。もう初代教会・教父の時代から十分に議論されてきたのだということが分かりました。そして、いろいろやってみたけれど、人間理性がいかにかっぽけであって、人間の作った理論がいかにか脆いものであるか、神を弁証するなどというのは実は逆であって、ただ信じるのだという先述の出発点に改めて帰ってきました。そこで、では何を研究すれば良いのかと考えさせられたのです。

そのような中で、私は「企業倫理」という学問に出会いました。薦められて入ったのはロヨラ大学 (Loyola University of Chicago) というカトリック・イエズス会の大学でした。「企業倫理」とは何かということをも簡単に説明したいと思います。日本人は、よく仏教徒と言われます。檀家制度などもあります。しかし、多くの方々は仏教など全然信じていないと思いま

す。私の同級生の僧侶がこんなことを悩んでいました。「牧師はいいよなあ。死にゆく信者の最期を看取ることができて。おれが行ったら『まだ早い、死んでから来い』だもんなあ。」確かに、少なくとも、真剣に仏教にコミットする信者は少ないと思います。では、現代の日本社会で最も信者の多い宗教は何か。それは「会社教」です。これは戦後一番伸びた、目に見えない新宗教です。多くの日本人が、これに献身し、命がけで従っているのです。大の大人が企業という偶像を崇拝しているのです。とはいえ、昨今はもはや会社には頼れません。私は、日本宣教ということを考えるとき、この「会社教」を打ち破らないといけなとを考えました。最近では、ワークライフバランスということが言われ始め、タバコ、飲み会、ゴルフもやらなくなったことを考えると企業の「福音主義化」が起こっているとも思います。

次に大学院の種類について説明したいと思います。そもそも、「働く」ということを考えた場合、私は三つの道があると考えます。第一が、企業人として世俗のなかで輝くという道、第二がNPOや役所で働くという道、第三が教師や学者など専門職でしょう。この第三の道にかかわるのが、大学院という進路でしょう。「専門家」になるという道です。

大学院は専門職大学院と研究職大学院の二種類があります。専門職大学院は大学卒業後すぐ行くというよりは、企業やNPOなどで経験を積んだ後に行くという種類のものです。研究職大学院のなかには、修士課程と博士課程がありますが、修士課程は、専門知識を固める時期です。ここまでではいいのですが、博士課程に進むのは慎重にならなければなりません。ぜひ今ついている先生についていけるかどうかを自問してください。博士課程では、ユニークさが求められます。言うなれば師を追い抜かなければならないのです。そして、日本の大学院か海外の大学院かも迷うところでしょう。興味深いのは海外の大学院では、学部と専攻を変える人が多いということです。また、師弟関係もさらっとした関係ですね。

専門職は伝統的には聖職者・法律家・医師をさしますが、現代社会では教師・研究者・技術者・公認会計士・弁護士・弁理士・司法書士・税理士・臨床心理士なども指します。聖職者となるとき、「召し」の確信が問われ

ると言われます。自分を無にして仕えないとやっていけないからでしょう。本来こうしたプロフェッショナルはもうかるとか、名誉とか、そのようなことは独立の仕事です。さらに、細かい専門知識があるだけでなく専門職特権という、普通の人にはない特権もあります。自分の利益は捨てて、使命感・倫理観を持たなくてはいけない理由がそこにあります。惜しみなく与える人でなければなりません。誰であれ全力で助ける人でなければなりません。クリスチャンはすでにそうである者たちでしょう。その意味では、クリスチャンこそ、専門職となってほしいのです。

イエズス会ではこのような制度があるそうです。会をあげて、それぞれの学問の最先端をだれかが把握しているようにすると言うのです。ナノ・テクでも、分子生物学でも、倫理学でも、行動経済学でも、会のなかで誰も分からないということはないようにすると言うのです。ある特定の分野について、何も言えないとしたら、教会として無責任ではないかということがこの考え方の前提にあります。今の日本の教会ではこのようなことはできていないでしょう。私には KGK には、これを担う可能性があると思います。原子力のこと、政治のことをクリスチャンとしてどのように考えるかということを示唆していくということを、KGK へのチャレンジとしたいと思います。

また、それぞれの大学に KGK の卒業生である教員がいて、聖書研究会の顧問になれば、学内伝道も大いに前進するでしょう。日本には多くのミッション系の学校がありますが、信仰者である教員が少なく、キリスト者の教員を一定数確保するための「クリスチャン条項」などの規定をはずさざるを得ない学校もあるのが現状です。これは教会としてもっと危機感をもたねばなりません。

とはいえ、研究者というのは厳しい道です、研究職は 30 代まで修行中です。非常勤であれば一年で 20 ～ 25 万円しかもらえません。高校教師をすれば 700 万円です。企業に入った方が楽です。もちろん最近は企業であっても終身雇用制が崩れています。しかし研究者はもっと厳しいのです。また、研究職は孤独です。周りの友人が収入を得、結婚していくなかで、人生に不安をもちます。その意味でも「志学会」のような交わりが必要な

のです。

研究することによって、客観的に考え、整理をし、多様な視点もつことができます。それは信仰の成長ともつながるものなのです。

※志学会…キリスト教信仰を有する若手研究者や、研究職あるいはそれに準じる専門職を目指す大学院生・学部生を、講演会・リトリートなどの交わりの機会や研究助成金を提供することによって、励まし支援する組織。2011年より関東地区主事である塚本良樹が志学会主事・事務局長として奉仕している。(ホームページ：<http://shigakukai.net/>)

Q & A

1. 勉強が忙しい時、神様との時間をとれないことがあります。

(回答：吉澤慎也 東海地区主事)

例えばテスト当日の朝。「まだ勉強が終わらない！時間が足りない！どうしよう～！！！」

こんな時私たちは、テスト直前までひたすら勉強し、その間「神様のことなんかちっとも考えられなかった…」となるのでしょうか。それとも「もうダメだ」と焦り、「神様助けてー！」とお祈りだけはするのでしょうか。「神様との時間をとれない」と感じるのは、おそらく「神様とのまとまった時間、整えられた時間をとれない」ということだと思います。つまり主日礼拝を守れない、静思の時（ディボーション、QTなど）ができない、ということでしょう。

主日礼拝ならば、7日間（1週間）のうちの1日を、そして静思の時ならば1日のうちのある特定の時間を、主のために「取り分ける」という態度はとても大切です。つまり他の時間と区別して、それを神様のための特別な時間とするということです。けれどもこれは（矛盾するように聞こえるかもしれませんが）、他の時間と切り離して考えるはいけません。元々「安息日を守りなさい」という旧約聖書の戒めには、「6日間は働いて7日目に休み、そこで自分を取り戻していく。それをしなければ、6日間きちんと働くことなどとてもできるものではない」という考えがあります。つまり、安息日があつての6日間なのです。そしてこの安息日の理念は、現在では主の日、すなわち日曜日に受け継がれています。ですから、主日礼拝によって私たちも整えられ、遣わされた場へとまた出て行くのです。さらにこの理念は、「個人的な礼拝」とも言える静思の時にも適用されて然るべきでしょう。

ですから、そうであるならば、「忙しい」「時間がない」と思えるような学生生活の真っ只中で、それでも本を閉じ、ペンを置き、(短くても) 静まって、御言葉と祈りのうちに主と交わる、という時間をとってみたら、案外

その方が勉強に集中できたとか、頭が冴えてすっきりしたとか、そんなことがリアルにあるはずなんです。でもこれは、自分で経験してみることをお勧めします。騙されたと思って(?) やってみる。そうしたら、そこから新しい世界が開けていくかもしれませんよ。

最後にもう一つ。「勉強が忙しい時」は確かにあります。でもそんな時でも、少しの工夫で時間を作り出すことができる場合もあります。非常に忙しく、かつライフスタイルがどんどん多様化していくような現代社会にあって、神様との時間を作るための努力を惜しまない姿勢は、とても大切なように思われます。

2. 将来に直接つながらないものに対して学習意欲がわきません。(回答：田中秀亮 元関東地区主事)

そういうこともありますよね。特に一般教養の授業がこれに当たるかもしれませんね。

僕は学生時代、専門科目の授業の多くが退屈に感じられました。「自分はなぜこの勉強をしているのか？」KGKで言うところの派遣意識がいつもこの部分で引っかかり、足下がどこかふらついていました。「確かに聖研や祈り会は新しく始まったけど、でも学校に来ているのはそのためだけじゃないし、勉強に対してこのモチベーションの低さだと派遣意識と言われてもなあ…」と。学校を変えようかと何度も思いました。

結局、「授業がつまらないので、勉強の意欲が湧かない」という思いは4年間いつもありました。でも、今思うと、あの時の自分に、「それでもいいんだよ」と優しく言ってあげたら、もう少し気が楽になったかもしれません。自分の周りに勉強に楽しそうに打ち込んでいる人を見ると、自分は駄目だなと思ってしまうのですが、それで落ち込みすぎなくてもいいんだよと。どういうモチベーションで勉強をしているのであれ、神様はあなたが今の学校のその学部・学科で学ぶことを許されたわけですから、忍耐をもって誠実に勉強・学問に取り組むのが、私たちキリスト者の為すべきことです。それは「したい」か「したくない」というモチベーションを超えて、私たちが「召し」として受け取ることです。

ある授業でのことでした。私は比較的真面目に授業に出席していましたが、テスト前に自分のところに過去問が回ってこなかったので、「優」がとれなかったという授業がありました。その時は、自分は真面目に授業に出たのに、最初と最後の授業だけ出て、過去問を手に入れた人が「優」をとっていることに憤りを覚えました。しかし、考えてみると、自分が授業に毎回出席したこと自体は意味がなかったことではないし、自分だけ損したと思わなくてもいいのではないかと思うようになりました。そもそも、最小の努力で最高の成績を取ることが最大の目標なわけではないことに徐々に気づいていく中で、自分は誠実に授業に取り組み、学業を修めることを大事にしていこうと思いました。

また、現時点で授業がつまらない、意味がないと思っても、それはあくまでも現時点でのことです。将来どうなるかはわかりません。あまり今の状況だけで善し悪しを決めないということも大事です。勉強でも、自分が美味しいと思うものばかりを食べられるわけではなく、苦かったり固かったりするものを食べなきゃいけないこともあります。食べ続ける中で美味しいと思えるようになることもあります。周りで将来のなりたい仕事に向かって、一心に勉強している人を見ると羨ましく思えるかもしれません。将来がまだ漠然としているなら、選り好みせず、色々積極的に食べてみる中で、将来が思わぬ形で見えてくることもあります。もちろん、食べ続ける中で、やっぱりこれはおいしくない、無理だとわかる授業や勉強もあるでしょう。それはそれで自分を知ることであり、それも意味があることです。僕は農学部でしたが、どうやら動植物にはあまり向いていないことがわかりました。

学習意欲が湧かないものに対しては、それを素直に受けとめましょう。無理強いして「これも神様への奉仕なんだ！」と言い聞かせることもできますが（そのように受けとめること自体は間違いではありませんし、適切だと思いますが）、一方で私たち人間には好みもありますから、そう言い聞かせようとしても長持ちしないでしょう。

今、与えられているものに静かに淡々と取り組んでいきましょう。僕は学生時代に、勉強に関して充実したという経験はそんなにありませんでし

た。でも、誠実に取り組もうと努力したことは間違っていなかったと思っています。みなさんが遣わされた学校で勉強・学問においても主の召しに応答していくことができますように。

3. 「主の栄光を表すため」という言葉をよくクリスチャンの中で耳にするが、具体的にどういうことなのか分かりません。「楽しいからやる、興味があるからやる」は間違っているのでしょうか？（回答：矢島志朗主事 事務局長）

そもそも、神様が人間を造られたのは、神の栄光をあらわすためです（イザヤ 43:7）。あなたを通して神の栄光はあらわされます。あなたが神の召しに忠実に歩もうとする時に、そのみわざはなされていきます。

大切なのは、動機であり、姿勢です。あなたが「楽しいから」「興味があるから」やろうとしていることは、どのようなものでしょうか？神様は「世界管理」と「福音宣教」という命令を人間に託していますが、この二つはいずれも、誰か他の人を助け、生かすことにつながるものです。今あなたがやりたいと思っていることは、この命令にかなうものですか？誰かを生かすことにつながりますか？もしそう思えるなら、その上で「楽しみ」もあることは、感謝して受け取ってよいと思います。

もし、あなたがやりたいことが誰一人生かすものではなく、ただ楽しいだけならば、考え直す必要があるかもしれません。神の賜物の管理人（1ペテロ 4:11）である私たちに求められるのは、与えられていること、託されていることに忠実であることです。イエス様の栄光が最もあらわされたのは、主に従い抜いて使命を全うし、十字架の苦しみを経て復活された時です。

成績の良し悪しや、うまくいくかどうかは本質的なことではなく、それ自体が「証しになるかどうか」に直結するわけではありません。最初からうまくいなくても、その人が忠実に主に従おうとする中で、少しずつ実が結ばれていくこと、困難や試練を経てその人が徐々にキリストの似姿に変えられていくことを通して「神の栄光」、別の言葉で言えば「神

様の素晴らしさ」があらわされていきます。

「神様、あなたの栄光があらわされるために、私のすべきことを教えてください。今行っていること、やりたいことはみこころにかなひ、誰かを助け、生かすことができるものか、教えてください。」と祈ることから始めませんか？主がふさわしい導きをくださることを信じています。

4. テストに全て合格したいとお祈りして挑んでも一つもか ないませんでした。(回答：老松望 関西地区主事)

実は、私も似たような経験をしたことがあります。大学受験の時ですが、私は志望校に受かるように、真剣にお祈りしていました。受験勉強もほどほどに、毎晩一時間近く祈っていました。けれど、結果は不合格。しかも、前期に受験した5つの全てに落ちてしまいました。私は、非常に落ち込み、怒り、神様に文句ばかり言っていました。後期試験を受けるつもりにしましたが、勉強する気になれず、聖書を読んで祈るということを繰り返していました。しかし、その中で、私は一つのことを気付かされました。それは、私自身の怠慢でした。いい加減に勉強し、「足りないところは、神様が補ってくださるだろう」とタカをくくり、さぼってばかりいた自分の愚かさを教えられたのです。その時に、私は悔い改め、後期試験までは真剣に勉強することを決心しました。そのようにして迎えた後期試験。不思議な神様の介入があり、28倍という倍率の中、無事に一つの大学に合格することができました。結局、最初の志望校に行くことはできませんでしたが、導かれた大学で、多くの貴重な経験をさせられました。「タラレバ」はクリスチャンには、ふさわしくないかもしれませんが、あの大学に行っていなければ、主事にはなっていなかったかもしれません。

さて、本題に入りたいと思いますが、結論から言いますと、「テストに全て合格したいとお祈りして挑んでも一つもかかないませんでした。」というあなたの質問に、私は答えることはできません。そして、今お話した私の経験が、答えになるとも思っていません。また、「あなたが合格できなかったのは、私と同じように怠慢だったからだ！」と言うつもりもありません。あなたには、あなたなりの事情があったのでしょし、またあなたには、

あなたにふさわしい神様の取り扱いがあるのでしょうか。ただ、少なくとも言えるのは、起こり来る全ての事柄の意味を知りうることなど、人にはできないということです（伝道者の書 7:23-24 参照）。また、これから先に何が起こるのかも知りえません（伝道者の書 8:6 参照）。厳しいようですが、そのことを素直に受けとめることが、まず必要なのではないかと思います。そして、後二つのことを付け加えたいと思います。一つ目は、祈りの目的は、神に私の思いを押し付けることではなく、私の思いを主のみこころに合わせることであること（J・I・パッカー著『私たちの主の祈り』pp.48-53 参照）です。そして、二つ目は、神は最善の計画を持っておられるということです（「御心」、「計画」について深めて考えたい人には、清水武夫著『私たちに現された神のみこころ』をお勧めします。）。これからも、不可解なことや理不尽に思えることに出くわすことがあるかと思いますが、神様の善意に信頼して積極的に歩んでいきたいものですね。

あとがき

本書の構想は、2011年関東地区 K GK 春期学校にてもたれた「学問を考える集会」を契機に生まれました。ちょうどあの東日本大震災の前日の3月10日、関東地区のOBでもある梅津光弘氏（慶應義塾大学准教授）の発題に応じ、熱い討議を重ねる学生たちの姿に心動かされた主事会は、この熱気をぜひひとつの形にしたいと願わされました。ここまで遅れてしまいましたが、はからずも全国の学生がともにこれからの日本宣教を考え、祈る機会である2013年全国集会（NC）の開催年にこのブックレットを出版できることに意義深さを覚えます。学生たちが「学ぶ意味」に真剣に取り組むこともまた、この国の宣教にとって大きな意義を持つと考えるからです。

本書は、信仰と学問の関係について、特定の分野と神学について、キリスト者研究者の方々が考察されている優れた書籍に並ぼうとするものではありません。本書の目的は、学生たちがキリスト者として「学ぶ意味」を考え、実際に学問に取り組むきっかけとなるということです。これを読んでもくださったみなさまが、本書を土台にさらに考え、学びを深めてくださるなら、これ以上の喜びはありません。

すばらしい文章を寄せてくださった、梅津光弘先生、大塚寿郎先生、鎌田泰行主事、そして答えにくいアンケートであるにも関わらず快く応じてくださった全国の学生諸君、様々なアドバイスをくださった主事のみなさま、デザインを担当してくださった卒業生の廣田真佳さん、そして導いてくださった主イエス・キリストの父なる神に心から感謝します。

私たちの小さなわざを豊かに用いてくださることに期待しつつ。

塚本良樹
キリスト者学生会関東地区主事